

登場人物

貸間有二 (かしまゆうじ・・・売れっ子の映画監督、四十代半ば)

下手村 (へたむら・・・その新しい助監督、二十代半ば)

神野弥生 (かみのやよい・・・新人女優、二十代半ば)

(注) これ以外に旅館の仲居さんの声があります

1

頃は昔の良き時代。つまり、まだ映画が花形産業であった時代だと思ってください。

ところはその、映画の撮影場に近い旅館の縁側のある離屋 (はなれ)。

かつては、こういう所に逗留をして、映画監督はシナリオを書いたのであります。

季節は夏。小さな盥 (たらい) 桶にドンと氷の塊がひとつ。その傍らに中堅映画

監督の貸間有二が、黒檀の座敷机に頬杖ついて、少し離れた所にその新しい助監

督の下手村が8ミリ映写機を磨いております。

貸間は普通の標準語を喋りますが、下手村は、アクセントに関西訛がみられます。

下手村 (映写機を置くと) お茶、いれましようか。(お茶をいれる)

貸間 (下手村をみないで) 何時ですかね。

下手村 (時計をみるでもなく) 4時ですな。

貸間 4時ですか。もうすぐ風呂のお知らせが来ますね。

下手村 そう、ですね、そんな時間ですかね。

貸間 ちよっと、酒には早いですか。

暫しあって、

下手村 (湯飲みを置いて) お茶、入りました。

また暫しあって、

貸間 (その茶を飲むでもなく) 西日が強いですね。

下手村 ええ、直接には差し込んできませんが、一応、簀の子と簾でなんとか。

貸間 西方浄土といます、ありや、西のほうにあるんでしょ。

下手村 西方ですから、ええ。

貸間 浄土というのは極楽のことですか(と、これは訊ねているのではナイ)。

下手村 はい。

貸間 そうすると、西日というのは、極楽から差し込んでくると。

下手村 ですかね。

貸間 極楽がこんなに暑いンじゃ、たまらんでげすな。

下手村 極楽はもっと涼しいでしょう。

貸間 まあ、住みいいところなんだろう。それが証拠に、あっちからこっちの世界

に帰ってきた馬鹿はおりません。

下手村 なるほど。

貸間 (桶の氷の周囲に手をかざして) この氷で、いったいこの離屋(はなれ)のどれく

らいが冷えるんですかね。

下手村 気のもんでっしゃろ。

貸間 アメリカじゃ、クーラーという機械があるそうでは。

下手村 クーラー、何ですかそれは。

貸間 coolのcoolerです。

下手村 冷やすんですか、ひよっとして、これくらいの部屋を。

貸間 らしいです。(と、湯飲みを覗き込み) おっ、茶柱だ。茶柱が立っています。

下手村 えっ、どれ、(と、覗き込む) ほう。

貸間 (暫し、みているが、ふいに) つくづくと鑑みるに、私たちは退屈してますか。

下手村 そうですね。

貸間 退屈はいけません。人間、退屈すると駄目になります。

下手村 そうですか。

貸間 ここに来て、何日になりますか。

下手村 五日めです。

貸間 で、外は夏と。

下手村 はい。

貸間 青春、朱夏、白秋、玄冬、光陰矢の如し。

下手村 少年老いや早く、学成り難し。朝に紅顔、ゆうべに白骨。

貸間 小人閑居して、不善すらなさず。

下手村 ペラは一行も進まず。

貸間 そうでげす。

下手村 タイトルすら、まだナイ。

貸間 あなたは、焦燥してますか。

下手村 えっ、いや、そうでもありませんが。

貸間 実は私もそうでもないんです。

下手村 そうですか。

貸間 焦ってはイケナイ。人間焦るとろくなことはありません。

下手村 しかし、五日くらいじゃ、会社のほうでも催促はしないでしょう。

貸間 まあね。普通は、軽くひと月は籠もります。名監督や巨匠になると三カ月も温泉三味なんてのはざらですからね。

下手村 けっこうな御身分ですね。

貸間 作家なども売れっ子になると、温泉に逗留して小説を書くのですが、芸者をあげたりして遊びもするそうです。

下手村 足が出ませんか。

貸間 まあ、私たちは、旅館といっても、温泉とは違うこんな安宿の離屋ですから、そういうことは心配しなくてもよござんすがね。

下手村 温泉で、思いついたんですけど、監督の生まれは東北のほうでしたね。

貸間 (無然と) 生まれ。

下手村 岩手じゃなかったですか。あの辺は、いい温泉があるんじゃないですか。

貸間 (さらに無然として) 大沢温泉ですか。ただの湯治の温泉でげす。

下手村 私は滋賀ですから、温泉というのは(やや、考えるが) そうだな、北のほうにならあったかも知れません。

貸間 温泉がどうかしましたか。

下手村 いや、監督は故郷の話をおんまりなさらないので。

貸間 故郷の話など、するものではありません。

下手村 そうですか。

貸間 そんなものは、黙っておけばいいんです。

下手村 何故です。

貸間 遠くにありて思うものだからです。もともと、私は思ったりもしません。

下手村 なるほど。

貸間 しかし、温泉の話なら面白い話があります。私がまだ助監督だった時のことです。

花岡組がやはり温泉で逗留しました。あれは何の時だったですか、たしか『団扇と風鈴』でしたか。

下手村 『団扇と風鈴』というと、梶谷炉甲(かじやろこう)の原作ですね。

貸間 そうそう。それで、花岡監督というのは面倒見がいいですからねえ、私どものような下っ端の助監督にも、お呼びをかけてくださいまして数人でいったんですが、その

面子の中に知ってる者があってね、それで、さっそく風呂の湯を抜いたんです。

下手村 あの、監督、どうも、話がよくみえませんが。

貸間 今にわかります。よろしいですか、その温泉は大浴場を持つ温泉ではなくて、風呂は小ぶりだったんです。シナリオライターの手野さんは監督と一緒に逗留されていた

んですが、この手野さんというのが、風呂の中で小便をする癖があるんです。彼は淋病なのです。淋病は、風呂の中で小便をすると気持ちがいいんです。ところが、監督

は、それを知らなかった。しかし、後から行った古株の人はそのことを知っていました。手野さんが風呂に入ったアトは風呂の湯を抜いたという話です。実話でげすよ。

下手村 すると花岡監督は毎晩といいますか、その手野さんの小便風呂に入っていましたか。

貸間 そうでげす。そのうえに、その温泉の湯は飲めるんだそうで、飲んでらしたようです。つまり、ここからわかる事実は、淋病は飲んでもうつらないということでげす。

下手村 はあ、そうですか。
貸間 面白くありませんか。

暫しの間がある。

仲居らしい女性の声がする。

——お風呂、入っとくんはれや。

下手村 ああ、わかりました。

貸間 何が。

下手村 この逗留客にも、そういう不埒な者がいるかも知れないので、一番風呂がいい
ということですね。

貸間 ぜんぜん、そういうことでもないです。

また暫しの間がある。

下手村 夜の鍋でも注文しときますか。

貸間 鍋ですか。

下手村 今晚も鍋でしょ。

貸間 鍋です。

下手村 しかし、夏に鍋というのは珍しい客でしょうね。

貸間 鍋です。あれで一汗かかんです。暑いときには暑いものを食う。これがほんとうの
食通というものです。

下手村 さて、今晚の鍋は。

貸間 鍋の思案もよろしいですが、いつまでも、飲み食いに風呂ばかりというワケにもい
きませんナ。

下手村 えっ、では、いよいよ、シナリオに着手しますか。

貸間 うーん、そろそろでしょうね。

下手村 そろそろですね。

下手村は、畳の上に、肩身が狭そうに置かれていた書籍を数冊、抱えると、黒檀
の机に積んだ。

下手村 お待たせしましたという感じですね。せっかく買い揃えてきた甲斐があったとい
うもんです。

貸間 (積まれた本を、指でなぞったりしてみるが) このひとの作品は多くをいっぺんに
読むといささかゲンナリします。

下手村 そうですね。

貸間 それと、このひとの戯曲はおしなべて駄目でげすね。会社のほうじゃ、この中の戯
曲あたりから拾ってこれるんじゃないかと、ナイ知恵を働かせて期待しているよう
でげすが、このひとの戯曲は、私は認めません。

下手村 戯曲は駄目と。

貸間 駄目です。

下手村 私も、僭越ながら、あまりオモシロイとは思って読まなかつたんですが、どこがダメなんでしょうかね。

貸間 テーマとプロットが、同じだからです。

下手村 テーマとプロットが同じ、ああ、なるほど。

貸間 例えば、人間の貧しさを書くのに、貧困な家庭を書いてもしようがありません。

下手村 そうでんな。

貸間 それよりは、成り金の話を書いたほうがよろしい。

下手村 いや、ごもっとも。

貸間 感心していても仕方ありません。

下手村 はい、すはません。で、何がよろしいですかね。

貸間 短編にはいいものがあります。

下手村 ええ、さすが、日本のチェーホフといわれただけあります。

貸間 チェーホフは曰く「小説は短ければ短いほど良い」でげす。あなたは何が好きですか。

下手村 えっ、チェーホフですか。

貸間 (机上の本を叩いて) こいつでげす。

下手村 うーん、・・・私は、『黄金風景』です。

貸間 ほほう、あなたも、あのように屈託しておりますか。

下手村 屈託、うーん。

貸間 屈託してないんですか。

下手村 うーん、どうでしょうか。まあ、人並みというところでしょうか。

貸間 あなた、結婚は。

下手村 ええ、こないだ。

貸間 ほほう、こないだ。

下手村 はい、三月ほど前に。

貸間 へーえ。新婚さんでしたか。

下手村 一応。

貸間 で、その時は、もうこの業界に。

下手村 津田監督のところ、本を書いてました。

貸間 津田監督の『縄暖簾』、あれあなたですか。

下手村 いや、シナリオは斎藤正夫さんです。私はサブということで、一部の方言のほうを担当しただけです。

貸間 あれって滋賀県の方言が出てきましたか。

下手村 というか、私の地方は、大津で京都に近いんですけど、コトバのニュアンスは河内弁とよく似ているんです。つまり、なんとか汚いんですね。道具の裏方をやっていた時に、平気でその方言を使ったら、親方に呼び出されましていわれました。・・・下手村くん、君、コトバをやめなさい・・・。

貸間 (笑う) ケケケ。コトバをやめるとききましたか。

下手村 はい。しかし、やめるワケにはいかないので、それから寡黙になりました。

貸間 (笑う) カツカツカ。寡黙、いいですな。

下手村 いや、あまりよくありません。何だか故郷を否定されたようで。

貸間 (真面目に) 故郷なんざ、否定すればいいじゃありませんか。

下手村 そうですか。

貸間 そうです。

下手村 しかし、私の故郷はすね、滋賀の大津なんですけど、まあ、さしていいところでもなかったですが、ともかくも十八まではそこにいましたから、つまり、何とか、

か、いちばん感受性の強い頃を過ごしているワケですからねえ、友達もその頃の、

貸間 (あきらかに遮って) 今夜の鍋は何がいいですかネ。

下手村 えっ。

貸間 鍋です。私は、味噌チャンコがいいと思いますが。あなたの教えてくれた鍋です。

味噌をグラグラと煮立てて、そこに玉葱や蕓を放り込む。肉はカシワでしたね。あの

鍋は汗がだらだら出ます。

下手村 今夜の鍋、いま、注文するんですか。

貸間 いえ、今しろとはいってません。

下手村 はい。あつ、そうですね。

暫しの間。

つまり、故郷について語ることは貸間監督の機嫌を損ねるか、あるいは、その件について追 求すると喧嘩になるかも知れないと下手村はやっと察知したのである。

下手村 (話題を戻して) それで、まあ、そんな私の方言を聞いていた津田監督が、・・お

い、君、今度の私のシヤシンなんだが、『縄暖簾』というんだ。そのバラケツの使うコ

トバを脚本で書き直してくれんかと。

貸間 ほう、そりゃあ、運が悪かったですナ。

下手村 (聞き流して) はい、『縄暖簾』の他に島崎監督の『喧嘩凧』もやりました。アト

は、太田監督の『木枯らしの町』とかです。

貸間 それで、食っていきえると思って結婚しましたか。

下手村 いえ、出来ちゃったもんで。

貸間 出来ちゃった。

下手村 (頭を掻く) ええ、まあ。

貸間 (やや、怒って) 馬鹿、やっぱり馬鹿ですネ、君は。あなたは大馬鹿でげす。結婚

という愚行を成しただけでなく、赤ん坊までこさえるとは実に駄目です。すぐに別れ

なさい。離婚です。

下手村 でも、子供が。

貸間 子供なんざ、川に棄てるか孤児院にでもあずけなさい。

下手村 そんな無茶な。

貸間 そもそも、映画などに携わる者は結婚などしてはいけません。女をたらしこむのは

ヨロシイ。しかし、結婚などに現をぬかしてはいけません。

下手村 いけませんか。

貸間 いけません。だいたい、女なんぞの何処がいいんです。あんなもの、穴が一つ多いだけではありませんか。

下手村 穴。

貸間 そうです、穴です。しかもその穴は臭いときている。

下手村 (やや向きになって) じゃあ、監督は男色のほうですか。お稚児さんがいいんですか。ケツの穴はもっと臭いですよ。

貸間 私にはそんな趣味はありません。

下手村 女は好きなんですよ。

貸間 無論です。

下手村 おっ、前言を翻されましたね。

貸間 翻してません。

下手村 女は好きと仰った。

貸間 あなたが、男色家などというからです。弁護したのです。

下手村 私、面白いオカマ知ってますよ。オカマのケンちゃん。紹介しましょうか。ケツの穴、臭いですけど。

貸間 からかっているのですか。失敬だな君は。

下手村 いや、すみません。(ちよっとコトバを捜して) えっと、鍋、チャンコでしたっけ、頼んでおきますか。

貸間 頼みなさい。

下手村 (帳場らしきところに電話する)・・・もしもし、離屋です。今夜の鍋なんです。ね、監督のご所望で、味噌チャンコということで、ええ、そう、あれ。そうです、はい鳥で。アトは野菜をたっぷり適当に。時間ですか、ええ、いつもと同じでけっこうです。貸間 (独り言のように) しかし、私は時折あの女の穴を舐めてみたくなる衝動にかられます。

下手村 (受話器を置くと) そりゃあ、男としては、尋常、正常の肉欲といいますが、性衝動ですよ。エロスは生きる源ですから。

貸間 君は、フロイト主義者ですか。

下手村 イキナリの論理の飛躍です。監督、それは理屈の八咫飛びです。

貸間 いいじゃありませんか、源義経、飛び越えるのは素晴らしいじゃありませんか。インスパイアなどというものは、あなた、何かガニカによって飛び越えられる事ではないでげすか。しかし、ちよっと冷静になりました。いま現在、この時点で私が問題にしているのは、穴です。臭い穴を持った生物、女についてです。

下手村 ええ、わかりました。女について、ですね。それで、何なんですか、その短編小説の『黄金風景』と女というのが関係あるんですか。

貸間 読めてませんね、君は。全然読めてません。

下手村 読みましたよ。

貸間 字を読んだだけで、作品が読めてないんです。

下手村 そうでしょうか。

貸間 愚問ですよ。

下手村 愚問。

貸問 『黄金風景』は女じゃないですか。

下手村 女、あれは、女ですか。女について書かれていますか。

貸問 そうでげす。

下手村 たしかに、主人公の、これは太宰そのひとでしようけど、その自宅に、彼の故郷で女中をしていた女が現れます。で、彼はむかし、故郷の実家にいた頃、この女を苛めてます。その件について恨みごとをいいにきたのかと思うと、そうではなく、坊ちゃんはとてもいいひとだったといわれてしまう。まあ、愕然とするワケです。それで、逃げるんですか。で、もどってきくと、亭主と子供と浜辺で遊んでいる。

三人は海に小石を投げて笑いあっている。主人公は、負けたと思う。まさに黄金の風景だとその状況

をそう表現する。こうじゃないですか。このどこが、女について書かれていますか。

貸問 女が出てくるじゃありませんか。

下手村 出てくるだけですよ。

貸問 つまり、女の恐ろしさですよ。それを美化しちゃった馬鹿ですよ。男の敗北感ですよ。捨てた女が綺麗になつて、アトからしまったと思うのと同じです。

下手村 監督、おコトバですが、それは全然違うと思います。

貸問 違います。何が、故郷のむかしの女中ですか。ただの嫉妬じゃありませんか。幸福に対する妬みですよ。女中でも黄金になる。庶民大衆の恐ろしさ、とりわけ、女の怖さです。

下手村 はああ、その女中、たしか、おけいとかいいましたが、その元女中がむかし、故郷の実家にいたことが、監督の痛に触るということですか。

貸問 故郷は関係ありません。

下手村 もし、あの作品が女について書かれているのなら、それは作者の理想像としての女じゃないですかね。負けても美しいんですよ。その故郷の女中はですね、心底、

貸問 (横を向いた)

下手村 監督、

と、また仲居らしい声をする。

——はなれはん、お風呂、どうぞすえ。どうぞ、お入りやすな。
暫しの間。

下手村 お風呂、どうです。

貸問 うん、(暫しあって) いや、酒にしましょう。あれ、まだ残ってましたね。

下手村 どぶですか。

貸問 はい。

下手村 (片隅にまとめて置かれた種類の中から濁った酒の一升壇を取り出した。どぶろく、つまり、密造酒である) 他にも、頂いたスコッチやら清酒やがありますけど、これがよろしいんですよね。

貸問 はい、それがよろしい。

下手村 何ですかね。

貸間 あなた、他のがいいなら、そうしなさい。私はそれがいいだけです。

下手村 いや、私もおつきあいたします。苦労して買ってきたもんです。

貸間 (笑う) ほほほ。密造酒ですからね。官憲の目をぬって、裏道、細道、抜け道と、いや、ご苦労さんです。

下手村 (一升壺をみつめて、ふいに、障子のほうに振り向く) ちょっと風が出てきましたね。

貸間 そうですか。

下手村 ええ。

にわかに風の音が聞こえる。

貸間 一雨きてくれるとありがたいんですが。

下手村 夕立でんな。子供の頃は、あの夕立にわざと濡れるのがオモシロかったです。

貸間 いい少年時代をお過ごしでげす。

下手村 (湯飲みに注ぎながら) 『黄金風景』が駄目なら監督は何がいいんですか。

貸間 『魚服記』ですね。しかし、あの『晩年』とかいう小説集の最初の短編、えっと。

下手村 『葉』ですね。はっぱの『葉』です。

貸間 そうです。くだらないので、タイトルも失念しましたが、それです。あの書き出しは何ですか。

下手村 いけませんか。

貸間 ヴェルレーヌですよ。

下手村 「撰ばれてあることの 恍惚と不安と 二つわれにあり」ですな。

貸間 気取りです。ケツコウなもんです。

下手村 気負いじゃないんですか。

貸間 一緒です。

下手村 まあ、そうかも知れませんが、私はそのアトのほうは好きですね。

貸間 アト、死のうと思つてたら着物を貰つて夏用のものだから、夏まで生きようと思つたとかいうあれですか。

下手村 いや、そのアトですよ。えーとですね。「ノラもまた考えた。廊下へ出てうしろの扉をばたんとしたときに考えた。帰ろうかしら」これは秀逸ですよ。

貸間 イプセンを茶化しただけじゃないですか。

下手村 しかし、ひよつとするとほんとうにノラはそう考えたかも知れないと、そんな気にさせられませんか。

貸間 そこが、あの作家の詐術です。

下手村 詐術ですか。

貸間 実に、女子供のココロに取り入るのが巧みです。

下手村 私は『人形の家』そのものより、こっちの文句のほうが好きですがね。

貸間 それはあなたが、

下手村 女子供の手合い、そのレベルであると、はい、わかりました。

貸間 汝、自身を知れでげすな。

下手村 ソクラテスまで出てきましたか。えっと、何でしたっけ、ああ、『魚服記』がお好きでしたか。

貸間 いや、ほんとうはあんまり、好きではないのです。

下手村 えっ。

貸間 いや、内容はいいのです。ああいう民話のようなものを物語に仕立てあげる職人技というのがいいのです。しかし、何故ですか、どうしてああいう話は東北になりますか。下手村 そりゃあ、作者が津軽だからでしょう。たぶん、ああいう話は原話というか、元になる民話が津軽に存在したのと違いますか。

貸間 確かにそうでしょう。そうでなければ、ああは書けない。『走れメロス』だって原話はありません。しかし、『魚服記』にあの作者が観ているのは、滝壺です。恐ろしく青い滝壺です。吸い込まれてしまいそうな、そういう誘惑を仕掛ける滝壺、あんなものが目の前にあって、魚になれるのなら、誰だってこんな現世は棄てますね。まして太宰です。

下手村 滝壺ですか。

貸間 底無しのです。

下手村 底無しのも。

貸間 (少し思案の後) そう、で、げすな、私は『満願』がよろしい。

下手村 えっ、ああ、あれは、明るいですね。

貸間 そうです。パラソルに太陽が反射して、クルクルと回ります。よろしいでげす。

下手村 しかし、あれこそ女の話じゃないですか。肺病病みの亭主の病気が治ったかで、やっと亭主と交わってよろしいと、医者からお許しが出て、若い嫁が嬉しそうに帰っていく話でしょ。やっぱり穴の話じゃないですか。

貸間 ば、バツ馬鹿っ、あなたは、ほんとうに馬鹿です。あの作品を、そんな通俗的な読み方しか出来ないんですか。

下手村 いや、わざとそういつてみただけですよ。へへへ。

貸間 わざと。すると、私を試したワケですか。

下手村 いや、そんなだいそれた、

貸間 私はね、あれをあんなふうに撮るなんてことはしません。よろしいですか、(と、8

ミリカメラを指さす)。

下手村 (慌ててカメラを手にする)

貸間 まず、最初は雨ですよ。

下手村 (カメラを以後、貸間のいうように追って撮るかのように構える)

貸間 雨が降っています。それもざんざかの雨、場所は豪雨の玉川上水です。まず、最初のカットは上水の急流です。いや、クレーンのほうがイイですね。俯瞰からいきます。うんと高いところから、雨の視線になってぐんぐんと土堤に近づいていく。大勢の人々が右往左往しています。消防団とか警察関係とか、マスコミ、出版とかです。移動でいいでしょう。で、一瞬で「バツ」。そうすると、筵が二枚。カメラ寄ります。どちらからも足が出てます。反対側から手が出てます。その手が赤い扱きで繋がってます。アップですね。警官がその赤い扱きをナイフで切っているところです。ザックリ、プ

ツン。手がコロっとなります。カメラ移動して、川。カット変わってごうごうと流れる人食い川。その水の流れ。その流れに沿ってさらに遡って、また空にもどると、黒みが入って、場面変わって陽光うらかな土堤。パソルの女が歩いています。これが冒頭のシーンです。いいですか。

下手村 (カメラを置いて、メモをとる。それを、ざっと黙読、読み直す。それを貸間に見せて) こんなふうでいいですか。

貸間 (黙って読むと) いいでしょう。

下手村 イントロダクションとしては実に緊張感がありますよ。垂直の雨の視線なんて、スゴイですよ監督。それからシーンを変えての転換が素晴らしい。それでタイトルインですか。

貸間 いや、まだですね。

下手村 タイトルはどうします。

貸間 『満願』でいいじゃないですか。

下手村 タイトルは『満願』と。『満願』いいタイトルです。

貸間 皮肉でよろしい。死ぬも満願、生きるも満願です。このシーンで私のいいたいところはそれです。これが全編の主題になってもよござんす。

下手村 死ぬも満願、生きるも満願ですか。なるほど。しかし、これは短編ですから、これだけじゃシャシンになりませんね。

貸間 なりません。

下手村 他には何か入れますか。それとも、これを元に長くしますか。

貸間 それはあなたが考えなさい。

下手村 また、そんな我が儘を。

貸間 他には何があります。(書籍の山から一冊抜く)

下手村 (整えて) 有名なヤツなら『斜陽』ですか。

貸間 ケツ。あんな女の日記みたいなもの。

下手村 じゃあ、何が。

貸間 子供だましの作品なら、さっきいった『走れメロス』というのがありますが、あれはいやらしい作品ですからね。

下手村 読者に人気はあるんじゃないですか。

貸間 あたりまえです。あの作品はの狙いは作家の人気とりでげすから。

下手村 あの作者にしては珍しい部類じゃないですか。

貸間 いえいえ、元々、あの作家は戯作者なんです。その類の作品は優れているんです。ですから、そういうふうに生きれば生きられたんです。それを女や故郷にかまけたので、カッコつけなければならなかったのです。その報いですよ。心中だなんて。おまけに何ですかあの醜態は。

下手村 醜態。

貸間 芥川賞です。芥川賞くらいが何だというんです。だいたい、芥川龍之介は芥川賞をとってません。

下手村 あたりまえです。

貸間 先輩作家に泣きついたりして、みっともないいたらありません。

下手村 メロスとセリヌンティウスでは、どちらがお好きです。

貸間 セリヌンティウスというのは、ただのお人好しじゃあないですか。もちろんメロスというのは山師です。私はあの小説は恥ずかしくて読み通すのに苦労しました。ですから途中でメロスが逃げ出したり、セリヌンティウスが脱獄したりするんなら、それなりに面白いとは思いますが。そうしますか。

下手村 それでは、まったく逸脱してしまいます。たぶん、遺族が承知しないでしょう。おそらくファンも。

貸間 でげすから、やめます。しかし、人間というのは、そういう生き物です。あんなふうな作り話みたいに生きていくわけではありません。

下手村 私は、あの作家の健康な部分と読みましたが。まあ、あえて主題を挙げるといわれるなら、友情美談とかいうよりも、人間には、待つタイプと待たせるタイプがいて、それなりにツライもんだという、そんなところじゃないでしょうか。

貸間 いや、馬鹿。あなたの馬鹿は心底の馬鹿ですね。テーマはともかくも、あれの何処が健康です。あれこそがあの作家のもっとも不健康な部分、病氣、疾病、宿痾、業病、不具、カタワ、

下手村 ええ、もう、その辺で。

貸間 美談などは、戦時中にラジオから腐るほど聞かされました。みんな嘘でげす。

下手村 じゃあ、その路線はナシと。

貸間 他に、何がいいですか。

下手村 いや、手辺り次第にというのならあるんですけど、そうですね、それならそれで、変わったところで『お伽草紙』なんてのはどうですか。

貸間 ずいぶんと傾向が違いますね。

下手村 ええ、ですからね、その『満願』の妻の旦那というのが作家なんです。

貸間 (暫し、下手村の顔を凝視しているが) うん、続けなさい。

下手村 で、家で書き物をしていると、それが『お伽草紙』で、劇中劇でその話を挿入するというのはどうでしょう。

貸間 よくある手法でげすな。

下手村 そういわれると、もう、身も蓋もナイんですが。

貸間 たしかに、まあ、あれは、あの作者の戯作の本領が発揮されています。

下手村 でしょ。だから、どうでしょう。

貸間 『お伽草紙』・・・

下手村 はい。

貸間 「惚れたが悪いか」ですか。

下手村 ええと、それは『カチカチ山』ですね。狸が兎を好きになる。狸は醜男で兎は少女だというふうの設定されています。その狸が兎の奸計によって、背中には大火傷、最後は泥の舟に乗せられて、沈められて殺される。まあ、物語は本歌通りです。(本を一冊、手にして) ああ、これですね。(ページを繰る) 監督の仰ったのは最後のところでしたね。

——ところでこれは、好色の戒めとでもいうのであろうか。十六歳の美しい処女には近寄るなという深切な忠告を匂わせた滑稽物語でもあろうか。或いはまた、節度を守れと

いう礼儀作法の教科書であろうか。或いはまた、善悪よりも、感覚の好き嫌いに依つて世の中の人たちはその日常生活に於いて互いに罵り、または罰し、または賞し、または服しているものだという事を暗示している笑い話であろうか。いやいや、そのように評論家的な結論に焦燥せずとも、狸の死ぬるいまわの際の一言にだけ留意して置いたら、いいのではあるまいか。曰く、惚れたが悪いか。古来、世界中の文芸の哀話（エレジー）の主題は、一にここにかかっていると云つても過言ではあるまい。女性にはすべて、この無慈悲な兎が

一匹住んでいるし、男性には、あの善良な狸がいつも溺れかかってあがいている。

貸間 たぶん、作者は、本気でそんなことを思っているワケではありません。そこに書かれていたことこそ、作者のサービス精神の現れといつていいでしょう。ただ、しかし、その戯作はみごとでげすな。読者をその気にさせてしまいます。通俗に一歩手前なんですけど、うまあく踏み止まっています。技量でげすな。

下手村 これなんか、いいですね。入れますか。

貸間 兎に狸では、童話です。

下手村 ええ、ですから、人間に置き換えたら如何でしょう。

貸間 やはり、狸のような醜男と、兎のような少女を登場させますか。

下手村 はい。

貸間 うん、いいでしょう。そういう手合いの役者ならいいのが揃ってますからね。

下手村 醜男はやりたがらないでしょうね。

貸間 別に醜くなくたって構いません。つまり普遍的な男性であればいいんです。

下手村 しかし、この兎は、少し悪女すぎやしませんか。

貸間 ほお、なのに、この作家は女性に人気があった。何故でげす。

下手村 （瞬時考えるが）女性の心理を捕まえるのが上手かったですか。

貸間 ただの女たらしです。生まれつきの。

下手村 しかし、それでも、モテたんでしょうね。

貸間 あなた、モテたいですか。

下手村 そりゃあ、男ですから。

貸間 私はモテます。

下手村 そうですか。

貸間 映画監督というのはモテるのでげす。

下手村 やっぱり。

貸間 女優なんざ、抱き放題です。向こうからいい寄ってきます。

下手村 いいですね。

貸間 助監督やシナリオ・ライターはモテません。

下手村 そうですか。

貸間 そうでげす。

下手村 ふーん。

貸間 残念でした。

下手村 どうしたら、そんなにモテるんですか。

貸間 簡単です。

下手村 簡単ですか。

貸間 嘘をつくことです。

下手村 嘘。

貸間 そうです。嘘つきはモテます。醜女に美人ですねという嘘がいえれば、それでモテます。尽きるどころ、それだけです。

下手村 そんなもんですか。

貸間 実にくだらんことです。

下手村 監督も、嘘をつくんですか。

貸間 (暫し、下手村の顔をぼんやりとみているが) 味噌チャンコの鶏肉はモモですか、ムネですか。

下手村 モモだと思いますが。

貸間 モモがいいです。

下手村 アトは・・・(と、また別の本を手にして) この黄村先生のシリーズは、シリーズといっても、三作キリですが、これはこれで一本のシャシンになりそうだという気がしましたが。

貸間 ああ、それはよろしい。ですから、そういうものを書いていれば良かったんです。

そういうものを書いていれば長生きできたんです。そういうものが書けたんです、彼は。どうってこともない老人学者の日常の喜劇を描いたかのようにせかけて、あきらかに当時の戦時権力をおちよくっています。それこそ、まさにチェーホフです。彼の書いたほんとうのチェーホフです。『斜陽』など、ニセモノです。

下手村 では、これはちよつとペンディングしておきませんか。贅沢かも知れませんが、こいつは使ってみたいですね。

貸間 いや、今回は駄目ですね。そういう路線ではないですね。

下手村 そうですか。じゃあ、さてと、うーん、(本を物色している)

と、電話が鳴る。

下手村 (電話を取って) はい、もしもし。こちらに回して下さい。・・・はい、もしもし

下手村です。ああ、どうも、代わりましょうか。いいですか。(貸間をみる)

貸間 (誰?という顔つき)

下手村 (電話口を覆って) 末広さんです。

貸間 (駄目駄目と合図)

下手村 で、何でしょう。えつ、はあ、はい。(また電話口を覆って貸間に) 女優を一人寄越すそうです。

貸間 女優。

下手村 (貸間に) お会いになりますか。

貸間 (首をふる)

下手村 (電話にもどって) 監督は会わないそうですけど。えつ、もう、差し向けた。一人ですか。一人でここまで来るんですか。(貸間をみる)

貸間 (小さく舌を打つ)

下手村 はい、わかりました。神野弥生さん。(メモする) 神様の神に、はあ、はい、東都映画の方なんです。新人さんですか。へーえ、貸間監督に会いたいと、ほう。わかりました。出てしまったのなら、しょうがないですね。ええ、善処いたします。えつ、ああもう、はい、順調です。タイトルも決まりました。『満願』です。はい、満点の満に、ええそうです。もうまったくの太宰治文学路線の大作です。はい、ええ、どうも。失礼します。(電話置く)

貸間 何ですか。

下手村 プロデューサーは手が離せないらしくて、そうしたら、彼女、いや、その新人の女優さんが、一人でも監督に会いたいと申し出て、いまこっちに向かっているんだそうです。えーと、神野弥生さんです。本名かどうかは聞き損じました。

貸間 会うんですか。

下手村 お会いになるのは、監督ですよ。

貸間 何故です。

下手村 末広さんの話では、使えるかどうかみてくれということでしたけど。

貸間 そんなのが、ここに押し掛けてくるんですか。

下手村 しょうがないですよ、もう出張ったアトだったんですから。

貸間 せっかく、シナリオのほうに、興に乗ってきたのに。

下手村 帰ってもらいますか。

貸間 あなた、追いつきなさい。

下手村 私がですか。

貸間 あなたの役目でしょ。

下手村 まったく会わないんですか。

貸間 チツチツチ。(洗面で思索している) だいたい、こういうところをですね、みせたくありませんね、私は、女優などに。

と、仲居の声がある。

――離屋はん、お客さんどすえ。

下手村 あっ、もう来ちゃった。早いな。早すぎるよ。

貸間 末広プロデューサーの電話が遅かったんですよ。

下手村 じゃあ、帰ってもらっていいんですね。

貸間 と、助監督が帰そうとするが、その新人女優は上がりこんで来てしまう。

下手村 えっ。

貸間 そんな展開になるんじゃないかという、ト書きをいったんです。映画や芝居なら、そうならないと物語が進展しません。

下手村 そりゃ、そうです。

襖の向こうで女の声がある。

――お邪魔します。よろしいでしょうか。

下手村 じゃあ、いいんですね。帰ってもらいますよ。
貸間 (頷く)

下手村、部屋の外に出て行くが、暫くして、便箋を一枚手にして戻ってくる。

下手村 (便箋を読みながら首をひねっている)

貸間 どうしました。帰りましたか。

下手村 いえ、これをね、監督にみせろ、いや、お渡ししてみただけだよ。(便箋を渡す)

貸間 (読む)

下手村 何ですかその、「この恋や思いきるべきさくらんぼ」というのは。俳句ですか、それとも何かの判じ物ですか。

貸間 これを、彼女が持っていたんですか。

下手村 ええ。

貸間 これをね。

下手村 どうします。

貸間 仕方無い。そうですね、こうしましょう。カメラテストをやるからと、その8ミリを回して、臭い穴の話でもさせるんです。すぐに帰ります。

下手村 じゃあ、お通ししていいんですか。

貸間 とりあえず、です。

下手村 さっきのト書き通りになってきましたね。わかりました。(部屋の入り口辺りに声をかける) どうぞ、お入り下さい。

背の高いワンピースの女が一人、折りたたんだ日傘を手に入ってくる。

丁寧に手をつくすと、頭を下げて挨拶する。

――神野弥生と申します。

暫し、そのまま。

貸間 (下手村を促して)

下手村 えっ、ああ、あの、顔を上げて下さい。

弥生 はい。突然押し掛けまして、申し訳ございません。本年の夏から東都映画にお世話になっております。今度、末広様のほうから、貸間監督の新作にどうかお声をかけて頂きました。

下手村 監督はこちらです。私は助監督のサブの下手村です。シナリオのほうを、ただいま監督と執筆中であります。

貸間 (弥生の顔を見て、眉間に少々皺を寄せている)

下手村 貸間監督とは初めてですね。

弥生 はい、お初にお目にかかります。

下手村 道中、暑かったですでしょう。

弥生 いえ、車でしたから。窓を開けていれば、風はけっこう涼しかったですわ。

下手村 あっ、そうですか。えーと、あっ、いま、お茶を入れます。

弥生 あら、お茶なら、私が。

下手村 いや、私たちはもう、こいつを飲っているんです。

弥生 それは。

下手村 どぶろくです。密造酒ですよ。

弥生 密造酒。

下手村 ええ、何もこんなものを飲まなくても、ウイスキーでもコニヤックでも、何でもあるんですけどね、監督がお好きなんです。

弥生 密造酒というのと、つまり、

下手村 そうそう、合法的な酒じゃないんですよ。あるところで秘密に造っているんですがね、どぶろく長屋というその、まあ、そういうところから、私が直に買って来るんですが、その、ですね、交番がありましてね、みつかるとヤバイんです。しかしまあ、そこはそれ、うまあく、運んでくるんです。骨ですが、監督のご所望ですからね。

貸間 恩きせがましくいうんじゃありません。

下手村 苦労は苦労ですから。

貸間 それくらい苦労は、(と、コトバに詰まって黙ってしまふ)

弥生 美味しいんですか、それ。

下手村 特殊な味ですね。甘酸っぱいといいますか。これをですね、寝かせて、濁りをとるとそれが清酒というワケなんですけども。

弥生 へーえ。

下手村 あの、お飲みになりますか。

弥生 頂いてよろしいんですか。

下手村 ええ、よろしいです。(湯飲みを出して注ぐ)

弥生 (少し口をつけて、それから、ぐいぐいと飲ってしまう)

下手村 ああ、そんな急に。

弥生 (小さく息を吐いて) 美味しゅうございますわ。

下手村 飲みっぷりがいいですね。

弥生 こういうものは飲んだことがなくて。

下手村 お注ぎしましょうか。

弥生 よろしいんですか。

下手村 ええ、いいですよ、監督。

貸間 (黙って飲んでいる)

下手村 かまいませんよ。また私がヤバイ橋を渡れば済むことですから。(注ぐ)

弥生 (今度は少し、口をつけるだけ)

暫しの間。

下手村 あの、おくにはどちらですか。

弥生 故郷(くに)ですか。

下手村 ええ、私は滋賀県、監督は岩手なんですが。

弥生 故郷は（と、少々思案しているが）

下手村 （促すように）ええ、はい。

弥生 あちら（と、あらぬ方向を指差す）

下手村 （そちらをみて、監督をみて）

貸間 （黙々と飲んでいる）

下手村 （また弥生に視線をもどすと）はは、面白い方ですね。

弥生 女優ですから。

下手村 ええ、そうですね。

また暫しの間。

貸間 （下手村になにやら合図）

下手村 （合点承知）ああ、そうそう、ちょっとカメラテストをしてよろしいですか。

弥生 いきなりですか。

下手村 はい、即戦力を求めておりますから。

弥生 はい、よろしゅうございます。

下手村 時に、弥生さん、あなたのおくには、穴のことを何といいます。

弥生 穴。

下手村 ただの穴じゃありませんよ。臭い穴です。女性特有の穴です。（と、いうや、貸間のほうをむいて、ニタリと笑った）

下手村 （ほんの少し笑ったか）
下手村 おわかりですか、穴ですよ。その穴のですね、説明というか、解説をして頂いているところをこいつで撮ります。カメラテストです。

弥生 （下手村を観て、貸間を観て、やや顔を上げると、覺ったらしく）はい、わかりました。

下手村 じゃあ、始めます。（カメラを構える）

弥生 （やや俯き加減に考えているが、やにはに顔をあげると、少し居住いを正して、フツと小さく呼吸を吐き）えっへん、ではやってみましょう。立ったところを正面から見た場合、見えるのはヘアだけです。両脚のあいだに、小さなクッションのような、やはりヘアの生えたやわらかな部分があって、直立すると、それがびったり合わさるので、それより内側は見えなくなります。しゃがむとそれが左右に分かれますが、その内側は真っ赤で、醜くて、生肉っぽい感じですよ。てっぺんに、外側の太陰唇にはさまれて、ちっぼけな皮膚の重なりがあり、よく見ると、これが一種の小さな袋のようになってるのがわかります。これがクリトリスです。つぎに小陰唇があって、これも小さな壁のように、たがいに合わさっています。これをひらくと、その内側に、私の親指の頭ほどもない、小さな肉質の根っこのようなものがあります。この先端は多孔質で、それぞれ異なる小さな孔がたくさんあり、おしっこはここから出てきます。さらにその下の部分は、一見ただの皮膚のように見えますが、じつは、ここに膣があります。見つけにくいのは、このあたり全体が小さな皮膚の重なりになっているせいです。その下の小さな孔は、見たところおそろしく小さく、ここから赤ちゃんが出て

くることはおろか、男性がはいってこれるとさえ思えないくらいです。それほど小さな孔なので、人指し指を入れることもできません。すくなくとも簡単には。たったそれだけのものなのに、これがとても重要な役割を果たしているんです。以上。

このせりふの間、弥生は、黒檀の机に飛び乗って立つと、ワンピースの裾を静かに持ち上げていく。白い素足が太腿あたりまでみえることになる。

下手村は仰天驚愕、カメラテストどころではなくなる。貸間は、真剣な目つきでそれを観ている。

弥生、話し終わって、ワンピースがストーンともにもどる。

貸間 下手村くん。

下手村 はい。

貸間 あなた、風呂、行きなさい。

下手村 へっ。

貸間 風呂です。

下手村 風呂ですか。

貸間 そうです。

下手村 いまですか。

貸間 風呂の時間ですよ。

下手村 ん、えっ、ああ、はい、わかりました。風呂に行きます。(そそくさと手拭いをつかむと出ていった)

暫しの間。

貸間と弥生、どぶろくをすすするように飲んでいる。

貸間 神野弥生さん。

弥生 はい。

貸間 本名ですか。

弥生 はい、本名です。

貸間 お姉さんは。

弥生 はい。綾子と申しました。

貸間 (ややあつて)「申しました」というコトバは過去形ですが。

弥生 亡くなりました。

貸間 (やや長い間をとって) そうですか。

弥生 胸を患っておりまして、去年、そう苦しむこともなく、自宅で亡くなりました。

貸間 そうですか。

弥生 何処にも嫁ぎませんでした。終生、独身でした。

貸間 そうですか。

弥生 晩年は、せんせいとの思い出をよく語ってくれました。

貸間 先生というと。

弥生 もちろん。

貸間 私ですか。

弥生 もうひと方いらっしやいましたけど。

貸間 なるほど。

弥生 せんせいは姉に何をお求めになりましたの。

貸間 求めた。・・・さあ。

弥生 母ですか、故郷ですか。

貸間 (母、故郷、というコトバをココロの中で反芻しているような間があつて) 母かも

知れませんが、故郷かも知れません。どちらでもナイような気がします。

弥生 もうひと方はそうでした。母と故郷。

貸間 じゃあ、私もそうだったんでしよう。

弥生 欲張りですね。

貸間 欲張りですか。

弥生 欲張りです。

貸間 それほど欲には執着(しゅうじゃく)してなかったつもりでしたが。

弥生 姉は、自分には、そんなにたくさんのはなかったのよ、と申しております。

貸間 もうひとりの先生のほうは欲張りだったかも知れませんが。

弥生 いいえ、せんせいもそうでしたのよ。

貸間 そう、お姉さんがいつてらしたんですか。

弥生 ええ。そう、申しております。

貸間 所詮、男が女に求めるものはそれです。「母」と「故郷」です。どちらも生まれてきたところですからね。回帰本能です。恋愛は、それだけです。

弥生 ほんとうに、それだけですか。

貸間 ほんとう、ほんとうのことは、ワカリマセン。愛と憎しみ、アンビバレントな思い

です。愛憎です。恋も故郷も一緒です。

弥生 そんな難しい恋を姉となさっていたのですか。

貸間 難しいかどうかは、ワカリマセン。

弥生 恋の何処が難しいのでしょうか。

貸間 うまく、(と、今度は苦々しい間を置いて) 答えられません。

弥生 恋など何も難しくはありません。偶然に起こって自然に終わるものです。

貸間 しかしもうひとりのほうは、それを小説に書こうとしました。

弥生 そう、聞いています。姉の日記を欲しがっておられました。

暫しの間。

弥生が貸間の湯飲みにどぶろくを注ぐ。

それから、また、二人ゆっくりその湯飲みの酒を流し込み。

弥生 あのひとは、姉と情交の関係がありました。でも、せんせいは何故、姉をお抱きに

ならなかったんですか。

貸間 (黙している)

弥生 構いませんわ、お話になって下さい。

貸間 ヤツが抱いたものを私が抱けるワケはありません。強いていうなら、私は抱かないことで愛情を示したかったんです。

弥生 ほんとうのことをいいますと、姉が抱かれたかったのは、貸間せんせいの方でしたのよ。

貸間 (湯飲みを口に運ぶ手が止まる)

弥生 と、申しましたら、どうなさいます。私、姉の口からそう聞きました。死ぬ間際でした。

貸間 (湯飲みを机 つまり、黒檀の卓上 に置いた)

弥生 あまりに残酷ではないでしょうか。

貸間 (先程の便箋を取って) これは、お姉さんが。

弥生 貸間せんせいが姉に寄越した歌でしょ、それ。

〔この恋や思いきるべきさくらんぼ〕

貸間 どうして助監督にみせたりしたんです。こういうものは、封筒に入れるなりして、私に直接渡すべきでした。

弥生 いいえ、封筒なんかに入れてお渡ししたら、せんせいはお読みにならないでしょ。

ダイレクトのインパクトですわ。

貸間 (その英語に少し苦笑したか) これは、形見の品ですか。

弥生 はい。それをお渡ししたかったこともあります。世の中には偶然なのか奇蹟なのかわからないことがあります。姉の恋人の片方は小説家に、片方は映画監督に、そうして、私が何をまちがったのか女優になんかかってしまいました。このお話をいただいた時、ちよっと迷いましたけど、これは奇蹟のカケラだと思って、思い切ってお会いして、姉のことを伝えたいと思いました。小説家のほうは、もう他の女性と逝っておしまいになりましたから。

貸間 私はあなたに綾子さんのことを語ったりはしません。

弥生 はい、心得ております。そんな方だと聞いておりますから。

貸間 それから、あなたは、女優としては及第ですが、今回の私のシャシンの仕事は落第です。失格ということですよ。

弥生 それは何故です。

貸間 理由はありません。

弥生 あら、じゃあ、私、出ますわ。きっと出ますわ。

貸間 監督は私です。

弥生 こういう場合、女優は監督に色仕掛けで迫るんですか。

貸間 私には、そういうものは通用しません。

弥生 そのつもりはありません。でも、私、出ます。プロデューサーの末広さんはOKなさってますから。

貸間 監督は私です。

弥生 (荒らぶらず、極めて沈着に) その、我が儘は許しません。姉の死に賭けて。いいえ、私の生き方として。

貸間 どうしてもですか。

弥生 (やはり、極めて平然と) 姉は、二人の男に棄てられたのです。

貸間 私は、(何をいおうとしたのか、コトバに詰まる)

弥生 ごめんなさい、いい過ぎました。すいません。申し訳ありません。

貸間 私は四十の半ばを過ぎてしまいました。「人間五十年、化天の内を比べれば、夢幻のごとくなり」織田信長の好んだ『幸若舞(こうわかまい)』の『敦盛』です。武士の舞です。私は武士ではありませんが、私ももうすぐ終わる。

弥生 だから。

貸間 いや、それだけです。

弥生 あらためて、お願いをいたします。先程の失礼の段お許し下さい。出演させてくださいまし、次の監督の作品に。それとも、私が何故女優になったのか、お話ししなければなりませんか。それを述べればよろしいのですか。

貸間 それは、推測できます。

弥生 姉は、

貸間 ええ、そうでしたね。

弥生 私は姉の意志を継いだと思ってます。

貸間 (また暫し考えるが) わかりました。出演を許諾しましょう。

弥生 ありがとうございます。では、乾杯。(湯飲みをぐいっといく)

貸間 (それを見届けるようにして、みている。もちろん、自分は飲まない) とはいえ、まだ本が来ておりません。

弥生 いいふうに書いて下さいませね。姉が満足するように。私も、姉に成り代わって、渾身、捨て身でやらせていただきます。

貸間 それは、あの男次第です。

その男が、風呂からもどってきた。

下手村 もどりました。

弥生 では、私はこれで。

下手村 えっ、何だ、お帰りですか。今夜は味噌チャンコなんですけど。どうです、どぶろく片手に食べていかれては。

弥生 ありがとうございます。でも、これ以上、お二人のお仕事のお邪魔をするワケにはいきません。

下手村 いや、仕事だなんて、そんな。

弥生 どうか、いい本を書いて下さい。

下手村 ええ、そりゃあもう、そのつもりですけど。

弥生 貸間監督の代表作にしてくださいね。

下手村 えっ、ああ、はい。

弥生 失礼いたしました。どぶろく、ごちそうさまでした。(どぶで少し酔ったのか、軽く歌っている)

川のち みじかし 恋せよ おとめ あかき ぐちびる あせぬまに あつきち
しおの ひえぬまに あすのつきひの ないものを

下手村 (呆感としている)

弥生 (下手村に) 今度から、カメラテストの時は、カメラにフィルムをお入れ下さるよう、お願いいたします。(弥生、去っていく)

下手村 使うんですか、彼女。

貸間 押し掛け女優でげすな。

下手村 そうでげすか。

貸間 ひとの口調を真似してはいけません。

下手村 風呂、行かれますか。

貸間 いや、ラストシーンをいいますから、メモしなさい。

下手村 えっ、出来たんですか。

貸間 絵はまだです。

下手村 はい。

貸間 (縁側に出ると)

にんげんねもなくへたもない

みちにさまようちりあくた

ときのながれにみをまかすだけ

しよせんこのよはつねならず

おなじこのよにうまれりやきようだい

えにしはおやよりふかいのだ

うれしいときにはよろこんで

ともだちあつめてのもうじゃしないか

わかいときはにどとはこない

あさがいちにちにどないように

いきてるうちがはなではないか

さいげつひとをまたないぜ

(このシーンのB・G・Mは『剣雨浮生』)

下手村 はあ、いいですね。これは、即興ですか。

貸間 陶淵明です。

下手村 へーえ。

貸間 まだつづきがあります。

下手村 はい。

貸間 はなにあらしのたとえもあるぞ

サヨナラだけがじんせいだ

下手村 はい。はなにあらしのたとえもあるぞ サヨナラだけがじんせいだ

貸間 ここは、宇武陵というひとの「勸酒」です。以上です。

下手村 わかりました。

と、仲居の声。

―― 離屋はん、お鍋の用意できましたけど。

下手村 あつ、はうい、わかりました。廊下に置いて下さい。

貸間 (さっきの便箋をみている)

下手村 ああ、それは何ですいったい。

貸間 何でもありません。

下手村 えーと、「この恋や思いきるべきさくらんぼ」でしたか。その最後のさくらんぼと
いうのは、何ですかね。

貸間 さくらんぼは、桜桃です。

下手村 それはわかりますけど。

貸間 鍋。

下手村 あ、はい。(出て行く。影から) 監督、雨です。降ってきよりました。

貸間 そうですね。

下手村 (鍋を持って戻って来る) 夕立になりましたね。

貸間 夏の縁側、夕立はいいもんですね。

下手村 濡れますよ監督。

貸間 うん、それだ、ラストシーンの彼女のせりふ、旦那にいうんです。く濡れますよあ
なたく

下手村 おつ、いいですね。

貸間 そうしたら、いきなり空が晴れる。

下手村 はい。

貸間 そこに、パラソルを持った妻が立っている。

雨の音、ピタリと止むと、貸間のいったごとく、弥生が、パラソルを開いて、振
り向いたところだ。

いま一度『剣雨浮生』流れて、

溶暗。

終演。

2 0 0 3 0 3 0 7
2 0 1 1 0 7 1 6
2 0 1 2 0 5 0 8

参考資料文献

『川島雄三 サヨナラだけが人生だ』(藤本義一、河出書房新社)

『花に嵐の映画もあるぞ』(川島雄三、河出書房新社)

『消費のなかの芸――ベストセラーを読む』(吉本隆明、ロッキング・オン)より 『ア
ンネの日記』アンネ・M・フランク、深町眞理子訳・完全版より)を引用。

太宰治の著作の引用『カチカチ山』については、新潮文庫を参考。